

〈書評論文〉

保育センターがもたらす予想外の収穫

Mario Luis Small⁽¹⁾,
*Unanticipated Gains: Origins of Network Inequality in
 Everyday Life*
 (Oxford University Press, 2009)

戸 江 哲 理

1 誰にとってのどんな収穫か？

Unanticipated Gains (『予想外の収穫』) という本書のタイトルは絶妙である。本書はアメリカ・ニューヨーク市の保育センター (childcare center)⁽²⁾ を舞台に、子どもを保育センターに通わせることが、親 (本書が扱うのは主に母親)・保育センター・政府 (連邦・州・市のどのレベルもふくむ) の3者にとって、予想外の収穫をもたらすことを議論した一書だからだ。

まず保育センターを利用する親は、子どもの世話をしてもらう以外に、子どもを育てるうえで有益な様々な機関へのアクセスを得ることや、親どうしのつながりを作ることが、とくに意図しなくてもできる。さらに後者に注目すると、この親どうしのつながりは、たとえば保護者会・保護者同伴の遠足・毎日の子どもの送迎などを通じて形成されることがあるが、それは保育センターが狙ったことではない。さらに政府も、たとえばヘッドスター

(1) シカゴ大学教授。本書で社会問題研究学会 (The Society for The Study of Social Problems) 選出の2009年度 Charles Wright Mills 賞を受賞。本賞の受賞は Small (2004) に続き2回目。

(2) 「教師・スタッフが、5名以上の子どもを、通常は年齢別の教室で世話している、公的認可を受けた組織」(本書 p. 30)。著者は資金源別に政府型・NPO型・企業型の3タイプに整理している (pp. 30-1)。政府型は、ヘッドスタート計画 (注3参照) にもとづく保育センターをふくみ、低所得者層向けである (p. 30)。NPO型は、宗教団体・エスニック組織などが運営する保育センターで、費用面での差が大きい (pp. 30-1)。企業型は、大企業の従業員向けのものから家族的経営のものまで多様である。営利的な保育センターではあるが、保育パウチャーの使用によって、低所得者層も利用可能である (pp. 30-1)。アメリカの保育制度については、深堀聰子 (2008)・松山有美 (2010) に比較的新しく詳しい紹介がある。

ト計画⁽³⁾にもとづく保育センターに保護者会を作ること求めているが、その本来の狙いは親を子どもの教育に参加させることで、親どうしのつながりを作ることではない……。

これらの例から窺えるように、保育センターで親どうしのつながりが生まれることは、親自身をふくめた保育センター関連の主要3アクターが必ずしも意図したことではない。また子育て関連の諸機関とのつながりも、親自身が特別な労力を払うことなく、保育センターを通じて容易に獲得できることも少なくない。そして親は、これらのつながりから様々な社会的サポートを入手することで、自分のウェルビーイング（簡単に言えば、生活の充実具合）を向上させることができるのではないかと。著者は分析の劈頭として、この問いを全国規模の量的調査、The Fragile Families and Child Wellbeing Study⁽⁴⁾のデータを使用して検討する（本書2章）。

分析結果のポイントを整理すると以下ようになる。(1) 母親は保育センターで友達ができると、経済的問題と精神的問題の両面でウェルビーイングの改善が期待できる（本書 pp. 43-7）。なお、保育センターで友達できた人は保育センターに子どもを通わせている母親全体の6割である（p. 37）。次に収入別にみると、(2) 貧しくない母親の場合、保育センターはそこで友達ができないとほとんど効果がないが、友達ができると経済的問題と精神的問題の両面で大きな効果が期待できる（p. 44, pp. 46-7）⁽⁵⁾。これに対して、(3) 貧しい母親の場合、たとえそこで友達ができなくても経済的問題の改善が期待できる（p. 44）。

(2) の結果からは、なぜ母親どうしのつながりが大きな効果を生むのかという疑問が湧いてくる。この疑問を受けて本書3・4・5章は、主にインタビュー調査にもとづいて母親どうしのつながりの実態を解明していく（本稿2節）。また(3)の結果は、保育センターの何が貧しい母親の経済的問題を改善するのかという問いを導く。本書6・7章は、保育

⁽³⁾ ヘッドスタート計画は、当時の Lyndon Baines Johnson 大統領の「貧困との戦い（War on Poverty）」というスローガンの下で1965年に創設された、アメリカ（の連邦政府）を代表する保育政策である。この政策は、貧しい家庭の子どもに保育サーヴィスを提供することに加え、子どもの教育に親が積極的に関与することも要請している。これらの支援を通じてヘッドスタート計画は、子どもが人生の順調なスタート（head start）を切られるようにし、延いては社会的な不平等を是正することを目指している。1994年には早期ヘッドスタート計画が創設され、従来から支援対象だった3・4歳児だけでなく、0～2歳児も支援対象となった。深堀（2008）も参照。

⁽⁴⁾ The Fragile Families and Child Wellbeing Study は、1998年から2000年の間にアメリカ20都市に生まれた子どもに焦点を定め、出生時と1・3・5歳の時点で親に面接調査を行っている（Center for Research on Child Wellbeing 2013: Para. 1, 3）。プロジェクトの名前から推測できるように、その主眼は未婚の親・離婚した親とその子どもの実態を明らかにすることにある（Center for Research on Child Wellbeing 2013: Para. 2）。本書は、子どもが3歳の時点と5歳の時点のデータ（母親3,500名）を使用して（p. 24）。

⁽⁵⁾ 但し精神的問題が深刻な場合は、母親が貧しいか貧しくないか、保育センターで友達できたかどうかと関係なく、問題の改善は期待できない（pp. 46-7）。

センターが母親に提供する子育て関連機関とのつながりという面から、この問いに取り組んでいく（本稿3節）。議論を先取りするなら、本書の中心的な主張は、この母親どうしのつながりと子育て関連諸機関とのつながりという2タイプのつながりが、どちらも保育センターという組織を基盤に成立しているということにある。著者の言葉を借りるなら、これら2種類のつながりは保育センターという「組織に埋め込まれたもの（organizational embeddedness）」なのである⁽⁶⁾。

2 他の母親たちとのつながり——内容紹介（1）

2-1 領域限定的な友達関係

保育センターに子どもを通わせている母親どうしは、子どもの送迎時に挨拶を交わすくらいの関係に留まることもあるが、友達といえる関係に発展することも少なくない。たとえばある母親は、保育センターで出会った他の母親と、子どもを連れずにディナーに行ったり、お互いの家族を連れて旅行に出かけたりしている（p. 90）。このような友達関係から、子育てをふくむ家庭生活全般のことやキャリアなどにかんする幅広いサポートを得られることは想像に難くない（p. 91）。

この付き合いかたを通常の意味での友達関係と呼ぶなら、このタイプとは少し違った友達関係も保育センターには存在している。その付き合いかたは、他の母親といわば領域限定的な（compartmental）友達関係を築くという付き合いかたである。この場合の付き合いが深くなる限定領域とは、子ども関連の領域（子ども・家族・保育センター）を指している（pp. 92-3）。著者はこの付き合いかたの一例として、会ったら子どものことばかり話しているという母親の発言を引いている（p. 93）。この関係ではお互いに期待できるサポートも子ども関連に限定される。たとえば、夜に自宅を留守にする場合・夫婦だけで出かけた場合などに、お互いに子どもを預け合うといったサポートである（pp. 98-9）。この例に象徴されるように、領域限定的な友達関係は子ども関連に特化した実利的な付き合いという側面をもっている。

2-2 領域限定的な友達関係の成立条件

著者は、保育センターでこの領域限定的に深い関係が成立する理由を次の2点に求めて

⁽⁶⁾ なお、本書1章は主要概念を紹介しながら本書の概要を説明しており、最後の8章は本書で得られた知見の応用と含意について議論している。これらの章は、保育センターをめぐる本書の内容を、社会関係資本・社会的ネットワークにかんする先行研究に位置づける役割を果たしている。

いる。第1に、似た立場の母親どうしは仲良くなりやすいこと。同じ保育センターに子どもを通わせている母親どうしは、社会階層・エスニシティ・個人的な志向などの面で共通点を見つけやすい。たとえば保育センターごとに料金設定が異なるため、同じ保育センターに子どもを通わせている家庭の社会階層は均質的になる。また、親は自宅から近い保育センターを選ぶ傾向があるが、自宅の近所には自分と同じ社会階層・エスニシティの人たちが暮らしていることが多いため、必然的に保育センターでも同じ社会階層・エスニシティの親子と出合いやすくなる。さらに、保育センターの理念・特色は個人的志向という面で似通った親たちを惹きつける。たとえば宗教を信じない母親たちは宗教的背景をもたない保育センターで出会う確率が高いだろう (pp. 101-2)。

第2の理由は、子どもを保育センターに通わせている母親どうしは頻繁に顔を合わせることである。たとえば子どもの日々の送り迎え、教師との月例ミーティングといった場面で、母親たちはくり返し顔を合わせ、言葉を交わすことになる (p. 103)。

これらの理由から、母親どうしのつながりが成立するうえで保育センターが重要な役割を果たしていることが窺える。つまり、保育センターの制度・規則・理念・立地といった要素が、母親どうしが親しくなる環境を整えているといえる。著者が、母親どうしのつながりは保育センターという組織に埋め込まれていると主張する理由はここにある。そして1節の冒頭で述べたように、保育センターの諸要素が母親どうしのつながりをもたらしことは、必ずしも保育センター自身が巧んだことではない (pp. 105-6)。

2-3 やりとりのくり返し・信用・サポート関係

日常的に顔を合わせ、言葉を交わすといった「やりとりのくり返し (repeated interaction)」は、母親どうしのサポートが成り立つうえでも大きな役割を果たしている。常識的に言って、サポート関係が成立するためにはお互いが信用し合っている必要がある。そして通説的な立場 (Coleman 1990=2004-2006) は、相手を信用するためには相手についての情報が必要と唱えている (pp. 108-9)。ところが保育センターに子どもを通わせている母親たちは、たとえ相手の名前すら知らなくても、同じ保育センターの他の母親 (の一部) を信用するし (p. 109)、必要な場合はその人の子どもの面倒をみる意思もあると語る (p. 112)。たとえば、一方が保育センターの閉所時刻までに子どもを迎えに行けない場合に、他方が自分の子どもと一緒に相手の子どもを自宅に連れて帰るという約束を交わし、実行した2人の母親たちがいるが、そのうち1人は相手の名前を憶えていなかった (p. 112)。この一見稀薄な関係にも映る母親どうしが、相手の子どもの面倒をみるという負担の大きなサポートをし合える背景には、2人が日頃から保育センターの保護者会で顔を合わせて

いるということがあった (p. 112)。つまり、たとえ相手についての個人的な情報が少なくても、日常的に顔を合わせ、やりとりをくり返すなかでお互いへの親近感が生じ、サポートし合うことが可能になる (pp. 112-7) ⁽⁷⁾。

3 保育センター以外の組織とのつながり——内容紹介 (2)

1 節で紹介したように、貧しい母親の場合はたとえ保育センターで友達ができなくても、ウェルビーイングの向上が期待できる。著者はこの理由についても、つながりという観点から明快に説明している。つまり保育センターは、母親どうしのつながりの前提条件を整えるだけでなく、母親と子どもに関連する他の組織・機関とのつながりも提供し、このことが貧しい母親のウェルビーイング向上に貢献していると議論する。

つながる先の機関は、子育て (たとえばヘッドスタート計画のオフィス)、教育 (たとえば公立・私立の小学校)、健康 (たとえば病院)、コミュニティ開発 (たとえば教会)、文化 (たとえば博物館) と多岐にわたり (pp. 132-5)、それに伴ってアクセスできるリソースの種類も、情報 (たとえば子どもの健康について)、サービス (たとえば家庭内暴力のカウンセリング)、物品 (たとえば文化・娯楽イベントのチケット) などバラエティに富んでいる (pp. 135-6)。さらに、母親とこれらの機関をつなげるやりかたも様々である。いくつか具体例を挙げると、食品会社の人を保育センターに招いて子どもの食べ物についてのセミナーを開く (pp. 140-3)、子どもの学習障害を心配する母親に外部の専門機関を紹介する (p. 146)、博物館のフリーパスを配布する (pp. 150-1)、待合スペースに開封済みのベビーフードの消費期限にかんするチラシを貼り出す (pp. 135-6) など、多種多様なチャンネルを用いて、保育センターは母親と関連諸機関をつなごうとする。

とはいえ、これらの組織とのつながりは保育センターだけの力によって実現しているのではない。連邦・州・市といった様々なレベルの政府当局が、保育センターが母親にこれらのつながりを提供できるように監督・支援している。たとえば連邦政府・ニューヨーク市はヘッドスタート計画の理念に則り、当該計画が創設した保育センターに対して、親による子どもの健康管理が不十分な場合には診療所を紹介するといった、保育という本来の業務以外の様々な業務も求めている。この結果、保育センターは地元の医療機関・小学校・障害児関連の機関などとの連携を図ることになる (pp. 161-2)。

⁽⁷⁾ とはいえ、保育センターで見つけた信用できる母親は、最後の手段として頼る相手ではある。そのため、社会関係資本の豊かな母親はそのつながりを生かすことも少ないが、たとえば親元を離れて生活するシングル・マザーにとっては貴重な頼みの綱となる (pp. 121-5)。

この政府からの組織とのつながりに対する監督・支援を踏まえ、著者は次のように議論している。つまり、つながりという点で大きな問題を抱えているのは、貧しい地域に住む母親よりもむしろ豊かな地域に住む貧しい母親である(pp. 167-8, 173-4)。なぜなら政府(と政府の活動を補完する NPO) は、従来から貧しいと捉えられてきた地域の保育センターの支援には力を入れるが、豊かな地域の保育センターの支援にはそれほどのパワーを割かないからである(pp. 167-8)。この洞察は学術的に興味深いだけでなく、ニューヨーク市に暮らす母親たちにとっても実践的に有益な知見といえるだろう。

4 現場スタッフの視点の有効性——内容検討 (1)

母親のウェルビーイング向上にとって、母親どうしのつながりだけでなく、小学校・病院といった子育て関連の組織・機関とのつながりも重要である。そして保育センターという組織は、母親がこのどちらのつながりを作るうえでも基盤となっている……。つまり著者は、つながる先とつなげる役目の両者において、組織が大きな役割を果たしていることを指摘している。これは逆に言えば、組織と没交渉であることが母親にとって大きな痛手となることを意味している。とくに保育センターは様々な相手とつながるためのハブの役割を果たしているため、ここにかかわるかどうかは母親たちのつながりの差(本書の副題の表現を用いるなら、「ネットワークの不平等」)を生む大きな要因となるだろう。

本書はこのように、保育センターとかがかわることが母親たちのつながり、延いてはウェルビーイングに大きな収穫をもたらすと主張するものだ。だが、それはどんな保育センターについてもいえることだろうか。本書からなかなか見えてこないものは、これらのつながりを支えているだろう個々の保育センターのスタッフたちの日常的な実践である。

確かに母親どうしのつながりは、保育センターのスタッフの働きかけがなくても生まれるかもしれない。だが、他の子育て関連諸機関とのつながりは、スタッフの活動によって維持されている部分が大いように思える。たとえば、親たちの関心が高い歯科医や看護師の出張セミナーを企画するとか(Cegłowski 1998: 66-7)、他の機関から送られてきたチラシから親の役に立ちそうなものを選んで待合室に貼り出すといった日々の仕事である。いや、母親どうしのつながりも実のところ、無料の食べ物・飲み物を用意することで仕事に忙しい親を保護者会に呼び寄せる(Cegłowski 1998: 68)などといった、スタッフの工夫が背景にあるかもしれない。本書は主に母親側の視点からつながりを捉えているが、その議論をスタッフ側の視点から捉え直すことで、つながりが生み出されるプロセスのよりリアルな姿を掴むことができるように思える。次節のポイントも、このつながりが生み出

されるプロセスにかんするものである。

5 相互行為の分析の必要性——内容検討 (2)

子育て支援サークル⁽⁸⁾の会話分析に取り組んできた評者から見た場合、本書が積み残した最大の課題のひとつは具体的な相互行為の分析である。2節で紹介したように、母親どうしがサポートし合うためにはお互いを信用する必要がある、その信用は保育センターで日常的に顔を合わせ、言葉を交わすといったやりとりのくり返しから生み出されると著者は議論している。つまり著者は、本書のこの中核的主張について最終的な説明を相互行為に求めている。だが、やりとりのくり返しが信用を生むというこの命題は、具体的なデータの検討から著者が自分で導き出したものではない。この命題はむしろ、交換理論(Homans [1961] 1974=1978)にもとづく一連の研究から著者が借りてきたものである(p. 113)。しかも、この交換理論からの知見は実験的環境で得られた成果にもとづく部分が大きく、保育センターの母親どうしの実生活でのやりとりにも援用可能かどうかについては議論の余地があることを、著者自身が認めている(p. 249)。つまり本書の中心的な主張は、具体的なデータ分析の裏づけを欠いた推測に留まっているのである。

この主張を検証するためには、保育センターで母親たちの具体的な相互行為のデータを長期間にわたって収集し、分析していく必要があるはずだ。同じことは保育センター以外の子どもと母親がやって来る場所についてもいえるし、舞台をアメリカから日本に移してもいえる。本書は、母親どうしのやりとりを長期間追跡し、そこからどのようにつながりが生まれるか(あるいは生まれないか)を調べるという課題を会話分析的研究に投げかけているのである⁽⁹⁾。この興味深い課題が、本書を読み終えた評者が受け取った、もっとも大きな予想外の収穫であった。

参考文献

Ceglowski, D., 1998, *Inside a Head Start Center: Developing Policies from Practice*, New York: Teachers College Press.

⁽⁸⁾ 子育て支援サークルとは簡単に言うと、乳幼児をもつ母親たちが集まって自由に話し合い、子どもたちを遊ばせ、そのスタッフが企画するイベントに参加できるような場所、およびそのような場所を提供する活動のことである。したがって子育て支援サークルは、保育センターにおける母親どうしのつながりの生成が予想外の収穫(unanticipated gains)であるのと対照的に、その生成を予想できる収穫(anticipated gains)としている活動だといえる。この点については戸江(2011b)・渡辺(2006)を参照。

⁽⁹⁾ この課題に関連して、戸江(2009, 2011a: 97-110)では、子育て支援サークルにおける親しい母親どうしのやりとりと、初対面どうしの関係もふくむ母親たちのやりとりの比較検討を行った。

- Center for Research on Child Wellbeing, 2013, "About the Fragile Families and Child Wellbeing Study," Princeton, NJ: Princeton University, (Retrieved November 1, 2013, <http://www.fragilefamilies.princeton.edu/about.asp>).
- Coleman, J. S., 1990, *Foundations of Social Theory*, Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press. (= 2004-2006, 久慈利武監訳『社会理論の基礎 上・下』青木書店.)
- 深堀聰子, 2008, 「学力の底上げをめざすユニバーサルな政策へ」 泉千勢・一見真理子・汐見稔幸編『未来への学力と日本の教育 9 世界の幼児教育・保育改革と学力』明石書店, 130-53.
- Homans, G. C., [1961] 1974, *Social Behavior: Its Elementary Forms*, rev. ed., New York: Harcourt Brace Jovanovich. (= 1978, 橋本茂訳『社会行動——その基本形態』誠信書房.)
- 松山有美, 2010, 「『自助努力社会』における保育政策と保育選択——アメリカを事例として」『名古屋学芸大学研究紀要 教養・学際編』6: 59-72.
- Small, M. L., 2004, *Villa Victoria: The Transformation of Social Capital in a Boston Barrio*, Chicago: Chicago University Press.
- 戸江哲理, 2009, 「乳幼児をもつ母親どうしの関係性のやりくり——子育て支援サークルにおける会話の分析から」『フォーラム現代社会学』8: 120-34.
- , 2011a, 「子育て支援サークルの会話分析」京都大学大学院文学研究科 2011 年度博士論文.
- , 2011b, 「なぜ通い続けるのか? ——ある子育て支援サークルの2つの利用のしかた」『京都社会学年報』19: 1-22.
- 渡辺顕一郎, 2006, 「地域子育て支援の拠点としての『ひろば』——利用者に対する調査結果から」渡辺顕一郎編『地域で子育て——地域全体で子育て家庭を支えるために』川島書店, 75-99.

(とえ てつり・日本学術振興会特別研究員 PD / 奈良女子大学)